

プチャーチンと日本の「開国」*

松村 岳志

日本の森元首相は、ウクライナ動乱さなかの2023年1月25日の演説で、ロシアを弁護した⁽¹⁾。これはつまり、日本には与党の中核の中にさえ、しかも、日露関係が非常に難しくなっている時でさえ、ロシアに非常に好意的な人々がいるということである。

もっともこのような呆れるほどに楽天的なロシアへの好意は以前から見られる。ポツダム宣言発表（1945年7月26日）以降でさえ、日本政府中枢の一部の人々は英米との停戦交渉のための仲介をソ連に頼ろうとしていた⁽²⁾。

一見すると、日本人のロシアに対するこのような好意ないし期待は非常に不可解である。なぜならば、ロシアと日本との間では、過去に複数の戦争があり、現在では千島列島をめぐる領土問題があるからである。それにもかかわらず、多くの日本人は現在でさえ、ロシアとロシア人とを愛し、信頼しているのである。おそらくこのような好意の背景には二つの国民の間での友好的な関係の確立に向けて何世代にもわたって、多くのロシア人と日本人とが積み重ねてきた努力がある。本稿では、プチャーチン外交団と日本の「開国」に至るまでの日露交渉の歴史を解明する。

「鎖国」

一般に江戸時代（1603-1868）の日本は「鎖国」状態にあった、つまり、自ら国を閉ざした状態にあり、この時代外国人とのあらゆる交渉が禁止されていたと考えられている。しかし、最近歴史家はこのような考えを見直した。現在では歴史家は江戸幕府が外国との関係を四つの窓に制限していたと考えている。その四つの窓とは、(1) アイヌ人との蝦夷（北海道）の松前口、(2) 朝鮮王国との対馬口、(3) 琉球王国との鹿児島口、(4) スペイン、ポルトガルと英国以外の全

* 本稿は、もともと「国際学術会議『時代の曲がり角でのロシア：クリミア戦争（1853-1854年）開戦170周年記念』（2023年10月23-24日、於聖ペテルブルグ）における筆者のコメントであった。そのコメントが、ロシア科学アカデミー聖ペテルブルグ支部歴史研究所先任学術研究員歴史学博士タチアナ・ワシリエヴァ・アンドレーエヴァの助言によりこの論文に発展したものである。アンドレーエヴァ博士と同会議の参加者には篤く御礼申し上げたい。なお、本稿では19世紀末までの全ての年月日は露暦で標記している。

(1) 「こんなにウクライナに力いれていいのか」プーチン氏と“親交” 森元総理が政府に苦言（2023年1月25日）（<https://www.youtube.com/watch?v=rFY6GcmYCO0> 2024年10月12日最終閲覧）

(2) 庄司潤一郎「戦争終結をめぐる日本の戦略—対ソ工作を中心として」三宅正樹、庄司潤一郎、石津朋之、山本文史編著『検証太平洋戦争とその戦略2（戦争と外交・同盟戦略）』中央公論新社、2013年、124-138頁、135、137頁；千々石泰明「戦後日米関係の前史としての太平洋戦争終結」『戦史研究年報』第26号、1-24頁、2023年、3、7頁

世界との長崎口である⁽³⁾。

そのうえ、江戸幕府は朝鮮及び琉球の両王国としか外交関係を有していなかった。したがって、日本は、中国とオランダを含めてそのほかの国や地域とは貿易関係しか有していなかったのである⁽⁴⁾。

このような制限の目的は15-16世紀の動乱の「倭寇」状況への復帰の阻止であった。「倭寇」は主に中国人からなる海賊であって、ポルトガル人まで含めた様々な民族集団から構成されていた。「倭寇」は、当時日本のみならず東アジア一帯で国境を無視して自由に移動し、貿易を行っていた。日本と中国では政府のみならず人民もこのような状況の克服を求めている。そこで江戸幕府も中国諸帝国も対外関係の制限政策をとった。このような政策が日本では「鎖国」と呼ばれているのである⁽⁵⁾。

「倭寇」は日本では地域の封建領主と一定の合意を得ていた。「倭寇」の指導者は商業の代理人であり、各民族集団の指導者であった。ポルトガル人の場合、このような役割を果たしていたのはイエズス会の宣教師であった⁽⁶⁾。イエズス会を保護した豊後守護大友義鎮（大友宗麟）は彼らから大砲生産技術を習得している⁽⁷⁾。

それゆえ「倭寇」状況の克服は当然のことながら、キリスト教宣教師の入国の禁止や日本人と外国人との接触の制限を伴った。日本社会はスペイン人やポルトガル人の宣教活動を植民地化の準備とみなしたのである。このようなキリスト教の禁止と幕府による外国貿易管理は寛永年間（1624-1645）に確立した⁽⁸⁾。

したがって、江戸時代の日本は必ずしも閉ざされていたわけではなかった。日本の漂流民は外国から日本に帰ることができたし、外国人漂流民も自分の故国に帰ることができた。もちろん特

-
- (3) ЩЕПКИН В. В., «Изучение сведений о Камчатке» (1783 г.)— первое в Японии сочинение о России// *История и культура традиционной Японии 8, СПб.*, 2015. PP. 297-309, P. 300; 上白石実『十九世紀日本の対外関係：開国という幻想の克服』吉川弘文館、2021年、23、26頁；荒野泰典「近代的世界の成熟」荒野泰典、石井正敏、村井章介編『近世的世界の成熟』（日本の対外関係 6）吉川弘文館、2010年、1-42頁、19-23頁
- (4) 羽賀祥二「和親条約期の幕府外交について」井上勝生編『開国』（幕末維新論集 2）、吉川弘文館、2001年、3-37頁、10頁
- (5) ЩЕПКИН В. В., КАРТАШЕВ К. М., «Ритуал и закон»: приём экспедиции Адама Лаксмана в Японии, *Ежегодник Японии*. 2017, № 46, PP.169-180. P. 300; 荒野泰典「近代的世界の成熟」34頁；荒野泰典「長崎口の形成」加藤榮一、北島万次、深谷克己編『幕藩制国家と異域・異国』校倉書房、1989年、383-451頁、394頁；上白石実『十九世紀日本の対外関係』1, 26, 83頁
- (6) 荒野泰典「長崎口の形成」391頁
- (7) 岡美穂子「海と権力：宣教師報告に見る畿内＝九州移動ルートの分析を手がかりに」『国立歴史民俗博物館研究報告』第223集、2021年、387-406頁、392-393頁
- (8) 生田美智子『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史：描かれた相互イメージ・表象』ミネルヴァ書房、2008年、30頁；奥田晴樹『幕末政治と開国：明治維新への胎動』勉誠出版、2018年、81頁；上白石実『十九世紀日本の対外関係』30頁

別の許可のない外国人は日本を自由に旅することができなかつた。しかし、外国人は、日英通商航海条約発効（1899）まではこのような旅行を禁じられていた。つまり、ペリーの来航（1853）前後で外国人の日本人との接触の制限になんら変化は生じていないのである。しかも明治維新（1868）のあとの日本の新しい帝国政府は、やはり日本人の外国人との接触を外国においてすら制限しており、日本人の外国への渡航を商業と留学のみに限って許していた。明らかにこれは「鎖国」政策の継続である。それゆえ、ペリーの来航は「鎖国」から「開国」への転換点ではない⁽⁹⁾。原則として江戸時代において、欧州諸国は日本と貿易することができたのである。

補足すると、徳川家の最初の将軍家康は全ての国々との関係の締結に努めた。だが日本は中国と外交関係を結ぶことができなかつた。さらに、欧州諸国との外交関係は17世紀に次々と失われた。英国は日本との貿易に成功せず、自分で日本との関係を放棄した（1623）。幕府は宣教師の派遣を避けるためにスペイン（1624）およびポルトガル（1639）との関係を完全に断つた。最後にオランダとの外交関係は、オランダ人が日本船を台湾に抑留したときに断絶し（1628）た⁽¹⁰⁾。このように寛永年間以降幕府は外国との貿易関係は許し続けたが、それらとの外交関係は朝鮮と琉球の両王国との間を除くと有していなかつたのである。

アダム・エリコヴィッチ・ラクスマンの来航

寛永年間以降外交関係締結のために日本に使節を送った最初の国はロシアであった。その背景にはロシア人のシベリア進出がある。彼らは18世紀には太平洋北部沿岸でラッコの毛皮を求めた。ところが彼らのラッコ猟の拠点であったオホーツクでは食料が十分ではなかつた。そこで彼らは日本から食料を買おうとした。実際ロシアの航海者シュパンベルグは1739年に仙台藩領で水と食料を補給した。1771年には流刑囚ベニョフスキーがカムチャッカを脱走して日本に至り、ロシアが日本の領土を侵略しようとしていると伝えた。日本人の間ではロシアが蝦夷を併合するのではないかという懸念を感じるものがでた⁽¹¹⁾。

(9) 上白石実『十九世紀日本の対外関係』26-27頁

(10) 加藤榮一「『公儀』と「オランダ」—オランダ東インド会社の外交戦略」、加藤榮一、北島万次、深谷克己編『幕藩制国家と異域・異国』293-338頁、323頁；紙屋敦之「対明政策と琉球支配—異国から「異国」へ」加藤榮一、北島万次、深谷克己編『幕藩制国家と異域・異国』247-289頁、271頁；中村質「東アジアと鎖国日本—唐船貿易を中心に」加藤榮一、北島万次、深谷克己編『幕藩制国家と異域・異国』345、347、349頁。英国は1673年に通商関係の再興を願い出た。しかし、幕府はこれを許さなかつた。当時のイギリス王妃がポルトガル王女だったからである。それゆえ幕府は英国王をポルトガル王の姻戚とみなしたのである。犬塚孝明「十九世紀初期日本人の英国像—日英交渉史の視角において—」井上勝生編『開国』（幕末維新論集2）、吉川弘文館、2001年、38-83頁、41-42頁

(11) ПЕТРОВ А. Ю. *Петровская эпоха и освоение северной часть тихого океана*, Рязань, 2022, Р. 126; 荒野泰典「近代的世界の成熟」32頁；生田美智子『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』9、10、43頁；奥田晴樹『幕末政治と開国』79頁；木崎良平『漂流民とロシア』中央公論社、1991年、42頁；三谷博『ペリー来航』吉川弘文館、2003年、9頁；山添博史「江戸時代中期に胚胎した日本型『近代的』国際秩序観：寛政期から幕末にかけての対ロシア政策を通じて」『国際政治』第139号、2004年、13-28頁、15頁；山添博史「ユーラシア

しかし、この初期の段階でも一部の日本人はロシアに非常に友好的であった。例えば仙台藩の医師工藤平助は1781年と1783年に『赤蝦夷風説考』を出版し、ロシアは日本を侵略する意図を持たないと主張した。1767年から1786年まで実質的な日本の統治者であった遠州相良藩主田沼意次は、重商主義者でもあり、蝦夷でのロシア人との貿易の可能性を検討した。もちろんほかの日本人はロシアを危険な略奪国家だと考えた。たとえば、やはり仙台藩の経世家林子平は『海国兵談』（1786）を出版し、ロシアは日本との貿易ではなくて、その領土の侵略を試みていると主張した⁽¹²⁾。

このような状況下で最初のロシアの使節アダム・エリコヴィッチ・ラクスマンが1792年10月、蝦夷の根室に到着した。彼は漂流民としてロシアにたどり着いた伊勢の船頭である大黒屋光太夫そのほかを帯同していた。当時蝦夷は松前藩領であり、松前藩の役人とラクスマン以下のロシア人とは友好的に贈り物を交換した⁽¹³⁾。

当時の幕閣で中心的な役割を果たしていたのは、聡明かつ多芸な陸奥白河藩主松平定信であった。松平定信はロシアとの外交関係の締結を拒否して、日本は伝統的に外国とは外交関係を持たないと述べた。しかし、彼はもし幕府がロシアとの貿易を拒否すると、ロシア人が怒って日本を襲うかもしれないと、また、ラクスマンが誠実にも漂流民を日本に送ってくれたのであるから、幕府は彼の要求を完全に拒否するべきではない、と考えた。それゆえ、松平定信はラクスマンに信牌を与え、もしラクスマンが日本との貿易を求めるとすれば、信牌を提示すれば長崎で貿易が可能である旨彼に伝えた。その時まで幕府はスペイン、ポルトガル、イギリス以外の外国との貿易関係を禁止していなかった。実際寛永期以降にタイの商船が長崎に入港している。それゆえもしラクスマンがこの時すぐに長崎に赴いておれば、日露間貿易は可能だったであろう⁽¹⁴⁾。ところで、松平定信は、伝統的な国法により、日本は外国と関係を持たず、日本軍は外国船が接近

帝国ロシアの境界問題と幕末日本」友田昌宏『幕末維新期の日本と世界：外交経験と相互認識』吉川弘文館、2019年、54-88頁、61頁。研究者の一部はベニョフスキーの日本人に対する通信は、日本人との貿易を独占しようとしたオランダ人による偽造であると考えている。Аров В.Н. Лиша чинов... сослать в камчатку // *Вестник Краунц Гуманитарные Науки*. 2003. № 2, 2003 PP. 53-68. P.65.

- (12) ЩЕПКИН В. В., «Изучение сведений о Камчатке» (1783 г.)— первое в Японии сочинение о России// *История и культура традиционной Японии* 8, СПб., 2015. PP. 297–309, P. 299; 荒野泰典「近代的世界の成熟」28頁; 生田美智子『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』10-11頁; 三谷博『ペリー来航』3, 6頁
- (13) 生田美智子『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』68, 69頁; 奥田晴樹『幕末政治と開国』79頁; 上白石実『幕末の海防戦略：異国船を隔離せよ』吉川弘文館、2011年、29, 30-31頁; 上白石実『十九世紀日本の対外関係』35頁; 木崎良平『漂流民とロシア』65頁; 白石仁章『プチャーチン：日本人が一番好きなロシア人』新人物往来社、2010年、25頁; 山添博史「ユーラシア帝国ロシアの境界問題と幕末日本」62頁
- (14) ЩЕПКИН В. В., КАРТАШЕВ К. М., «Ритуал и закон». P. 176; 生田美智子『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』74, 172頁; 奥田晴樹『幕末政治と開国』81頁; 上白石実『幕末の海防戦略』11, 26頁; 白石仁章『プチャーチン』25頁; 荒野泰典「近代的世界の成熟」30頁; 山添博史「江戸時代中期に胚胎した日本型『近代的』国際秩序観」19頁

すると攻撃するとラクスマンに嘘をついた⁽¹⁵⁾。そしてこの嘘は後に日本内外で真実と考えられるようになる。

なお、ラクスマンが日本に滞在していた間の日本人の記述の一つによれば、あるロシア人が、「日本人女性の黒髪は非常に美しい」とうたったという。このような記述は、当時の日本人がロシア人と日本人との間で恋愛関係が生じる可能性があると認めていたことを示している。なお、当時の日本人の手になるロシア人の画像が残されているが、これらの画像のなかのロシア人の顔は日本人の顔と同種の人間として描かれている。これは後のアメリカの遣日使節ペリー場合とは大きく異なる。というのは、ペリーの顔は、かならず日本人とは人種を異にするものとして、時には怪物のようにさえ描かれたからである。つまり、日本人はロシア人を日本人と同じ人間とみなし、アメリカ人を異人種、時には怪物とみなしたのである。さらに大黒屋光太夫はロシアについて様々な情報をもたらしたが、日本人はこうした情報からロシアを発展した国とみなすようになった⁽¹⁶⁾。

ニコライ・ペトロヴィッチ・レザノフの来航

ニコライ・ペトロヴィッチ・レザノフは1804年に長崎に来航した。彼は松平定信がラクスマンに交付した信牌をもっていた。ラクスマンと同じくレザノフは日本人漂流民の送還と外交関係の樹立のために来日した。長崎奉行所の役人がレザノフに彼の船の武装解除を要求すると、彼はオランダ人がそうしていたように、この要求に応じた。彼は長崎で幕府からの回答を6か月待った⁽¹⁷⁾。

しかし、当時松平定信はすでに失脚しており、彼の信牌はもはや無効であった。しかも幕府は、松平定信の嘘を拡大解釈して、日本は、海外の国々と新たに貿易関係を持たないと主張した⁽¹⁸⁾。このためレザノフは日本とはいかなる関係も樹立できなかった。彼は日本を平和裏に離れ、武力を用いようとはしなかった。こうしたレザノフの態度は非常に高く評価された。幕府は、1806年に、ロシア船が再び現れた場合、決して攻撃せず、穏やかに対応するよう命じた（文化の薪水給与令）⁽¹⁹⁾。

(15) ЩЕПКИН В. В., КАРТАШЕВ К. М., «Ритуал и закон». РР. 176, 178; 奥田晴樹『幕末政治と開国』80, 81頁; 山添博史「江戸時代中期に胚胎した日本型『近代的』国際秩序観」18-19頁

(16) 生田美智子『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』10, 13-14, 17, 22, 23頁

(17) 荒野泰典「長崎口の形成」385頁; 生田美智子『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』200頁; 奥田晴樹『幕末政治と開国』85頁; 上白石実『幕末の海防戦略』59頁; 上白石実『十九世紀日本の対外関係』32頁; 木崎良平『漂流民とロシア』93頁; 白石仁章『プチャーチン』25頁; 原田博二「長崎と広州」荒野泰典、石井正敏、村井章介編『近世的世界の成熟』212頁

(18) 山添博史「ユーラシア帝国ロシアの境界問題と幕末日本」63頁

(19) 奥田晴樹『幕末政治と開国』85頁; 上白石実『幕末の海防戦略』59, 60頁; 白石仁章『プチャーチン』25頁; 友田昌宏「仙台藩儒大槻磐溪の対外観」友田昌宏『幕末維新期の日本と世界：外交経験と相互認識』90-128頁, 105頁

ところが、レザノフはこのような幕府の命令を知らず、部下のフヴォストフに命じて千島列島および樺太の日本側拠点を実撃させた。フヴォストフは1806年から1807年にかけてこうした拠点を攻撃し、一部地域住民を拉致し、ついでに火砲一門を押収した。この火砲は大友義鎮が製造したものであった⁽²⁰⁾。

これはまさに松平定信が恐れていた怒りに任せての襲撃であった⁽²¹⁾。幕府は、態度を硬化させ、1807年に日本近海に現れたあらゆるロシア船舶を攻撃するよう命じた。さらにフヴォストフとは無関係に、1808年には英国船フェートン号が長崎を攻撃した。このため幕府は非常に神経質になった⁽²²⁾。

こうしたなかで、1811年6月、千島列島で測量を行っていたロシアのスループ艦「ディアナ」号の艦長ゴロヴニンが、日本側役人によって捕縛された。もちろんゴロヴニンはフヴォストフの攻撃とは何の関係もなかった。これに応じて「ディアナ」号副長のリコルドは1812年8月たまたまそこを通りかかった日本の商船を襲撃して廻船業者の高田屋嘉兵衛を捕縛した。もちろん高田屋もゴロヴニンの捕縛とは何の関係もなかった。日本人の役人はゴロヴニンがフヴォストフの襲撃とは何の関係もないことをすぐに理解した。しかし彼らは、フヴォストフの攻撃についてのなんらかの説明なしにはゴロヴニンを解放するわけにはいかなかった。高田屋とリコルドとは話し合い、そして、フヴォストフの襲撃が彼の勝手な行動であって、ロシア政府がこれに一切関係ない旨述べた文書をロシア政府が提出すればゴロヴニンの解放は実現するだろうと確信した。リコルドは大胆にも捕虜にしていた日本人3人全員を解放し、そのうち高田屋を通じて、ゴロヴニン解放のための日本側の条件を書面で提示するよう依頼した。高田屋は日本の役人からこの書類を受け取って、もちろん、リコルドの所に戻ってきた。リコルドは日本側の要求通りの書類を作成し、勇敢にもこれを自分で日本の役人に届けた。これでゴロヴニンも高田屋も釈放された⁽²³⁾。リコルドと高田屋との行動は相互の深い信頼の証拠である。

(20) СИНИЦЫН А. Ю., О судьбе коллекции японских предметов собрания кусткамера - МАЭ РАН, связанных с «экспедицией» Хвостова- Давыдова (1805–1807 гг.) // *Радовский сборник. Научные исследования и музейные проекты МАЭ РАН в 2009 г.* С П Б 2010, pp. 152-157, p. 153; 生田美智子『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』176頁; 岡美穂子「海と権力」392-393頁; 上白石実『幕末の海防戦略』64頁; 木崎良平『漂流民とロシア』110-115頁; 白石仁章『プチャーチン』26頁; 三谷博『ペリー来航』14頁; 山添博史「ユーラシア帝国ロシアの境界問題と幕末日本」63頁

(21) ЩЕПКИН В. В., КАРТАШЕВ К. М., «Ритуал и закон». P. 179; 山添博史「江戸時代中期に胚胎した日本型『近代的』国際秩序観」19頁; 山添博史「ユーラシア帝国ロシアの境界問題と幕末日本」63頁

(22) 生田美智子『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』176頁; 木崎良平『漂流民とロシア』118頁; 三谷博『ペリー来航』15頁

(23) КОЖЕВНИКОВА, Ирина П. Знаменательная встреча Василия Головинна и Такадая Кахэй: Давняя страница русско-японских отношений// *Acta Slavica Iaponica*, № 15, 1997, pp. 114-129. pp. 121-123; 生田美智子『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』176頁; 奥田晴樹『幕末政治と開国』87頁; 木崎良平『漂流民とロシア』122, 129頁; 白石仁章『プチャーチン』26頁; 三谷博『ペリー来航』15,16頁; 山添博史「ユーラシア帝国ロシアの境界問題と幕末日本」63頁

マシュー・コルブライト・ペリーの来航

阿片戦争（1840-1842）は日本に大変大きな影響を与えた。幕府はこの戦争を分析し、欧米諸国に勝利するのは不可能であるとの確信を強めた。そこで幕府はこのような国々との紛争を戦争ではなく、交渉によって解決するべく努力した。まず幕府は1842年には来航する外国船に薪と水を提供するよう命令した（天保の薪水給与令）。実際、アメリカのある捕鯨船が、1845年に日本の漂流民を送還した際には、この船は水と食料の補給を受けた。アメリカの別の捕鯨船の13人の漂流者は1849年に日本から合衆国に帰国した⁽²⁴⁾。

当時アメリカ人たちは日本を捕鯨船の補給基地として利用しようとしていた。1850年、アメリカ海軍の高級士官マシュー・ペリーはそのために武力を誇示するのが適切であると主張し、外交官ではなく軍人からなる使節団を派遣することを提案した。オランダはこれを直ちに幕府に通報した。幕府はペリーの艦隊が長崎ではなく、江戸近くの浦賀に来航すると予測し、平和的な外交交渉の準備を整えた⁽²⁵⁾。

1853年6月26日ペリー艦隊は幕府の予想通り浦賀に到着した。日本の役人はフランス語の退去命令を提示したがペリーはこれを無視した。役人たちはペリーに長崎への入港を何度も求めたが、これも受け入れてもらえなかった。反対にペリーは、もし浦賀での外交文書の受け取りを拒否されたなら、直接武装して江戸に向かうと日本人を脅迫した。ペリーの日記はアジア人への不信感に満ちていた。彼は日本人を武力で脅して有利な交渉を行い、できれば通商条約を結ぶことに頑固にこだわっていたのである。合衆国大統領はペリーに先制攻撃を禁じていたが、日本人はそのことを知らなかった⁽²⁶⁾。

それにもかかわらず、ペリーの外交交渉準備はまったく不十分であった。そもそも彼には十分な外交経験がなかった。ペリーは日本人との交渉のために条約案を準備することはしたが、この条約案は1844年に合衆国と中国との間で結ばれた望厦条約の中国語版であり、滑稽なことにアメリカ代表団の中には、この案が読めるものはほとんどいなかった。というのは、ペリーのもとで中国語が読めたのは中国語通訳2人だけだったからである。他に通訳はオランダ語通訳が一人がいるだけだった。反対に日本の全権代表は、朝鮮王国との外交関係に精通した大学頭（外務大臣）林復斎で、彼のもとには数十人の中国語通訳と4人のオランダ語通訳がいた。さらに日本の代表団の全員が条約案を読むことができた。というのは当時、教養ある日本人は全部漢文が読めたからである。したがって、日本側とアメリカ側との間で、交渉能力には大きな違いがあっ

(24) 加藤祐三「史上初の日米交渉：日米和親条約をめぐる」『アメリカ太平洋研究』第5巻、2005年、9-18頁、12頁；上白石実『十九世紀日本の対外関係』44-45頁；木崎良平『漂流民とロシア』177-178頁；三谷博『ペリー来航』88頁

(25) 奥田晴樹『幕末政治と開国』173頁；加藤祐三「史上初の日米交渉」13頁；上白石実『幕末の海防戦略』4頁；三谷博『ペリー来航』88、95、96-97頁

(26) 奥田晴樹『幕末政治と開国』174頁；上白石実『幕末の海防戦略』2頁；三谷博『ペリー来航』109、112、113、114頁；加藤祐三「史上初の日米交渉」11頁

た⁽²⁷⁾。

1854年2月24日、ペリーと林復齋とは交渉を開始した。ペリーは日本がアメリカ人漂流民を送還していないと批判し、もし日本が今後も漂流民を送還しないのであれば、日米間で戦争が生じる可能性を示し、さらに終わったばかりの米墨戦争でアメリカがメキシコの首都を奪取し、結局その領土の半ば近くを奪取したことを述べ、日本側を威嚇した。このような暴力団じみた事実無根の強迫に対して、林復齋はただ単に日本がアメリカ漂流民を送還していることを指摘してやるだけでよかった。これを聞くとペリーは黙ってしまい、しばらく考え、結局自分の通商条約要求を引っ込めた⁽²⁸⁾。

こうして結ばれた日米間の1854年の神奈川条約には貿易に関する条項が含まれておらず、望厦条約に比べて、はるかにアジア側に有利であった。ペリーは砲艦外交を展開した⁽²⁹⁾。それにもかかわらず、彼は漂流民の保護と石炭や水の補給しか確保できなかった。そしてそれらはそれまでにすでに実現されていたことであった。

エフィム・ヴァシリエヴィッチ・プチャーチンの来航

ロシア海軍副提督プチャーチンは1853年7月に日本側の要求通り長崎に来航した。その基本的任務は日露通商条約締結と日露国境策定であった。プチャーチンは長崎で外交文書の受領を求めた。しかし、長崎奉行はそのような権限を有しておらず、直ちにこれについて幕府の指示を仰いだ。プチャーチンは1853年12月まで長崎で幕府の回答を待たねばならなかった⁽³⁰⁾。

その間、長崎奉行所の役人がしばしばロシア船を訪れたが、彼らはロシア人が日本人に対して敵意を有していないと考えた。3人は長崎奉行に覚書を提出し、その中でロシア人が日本に非常に友好的であって、もし日本とアメリカとの間で戦争が生じた場合、ロシア帝国に軍事援助を求めることは可能かもしれない旨上申した⁽³¹⁾。当時まだ日米間の神奈川条約は結ばれておらず、日本人はアメリカとの戦争を恐れていたのである。

これらの下級役人だけでなく、老中首座である福山藩主阿部正弘、西の丸留守居役筒井政憲、勘定奉行川路聖謨も、アメリカが日本を攻撃した場合に、ロシア帝国に軍事援助を求めることを

(27) 加藤祐三「史上初の日米交渉」13頁；上白石実『幕末の海防戦略』2, 4, 46頁；上白石実『十九世紀日本の対外関係』46頁；三谷博『ペリー来航』110頁

(28) 石井孝『明治維新の国際的環境』分冊一増補改訂版、吉川弘文館、1973年、89, 90頁；加藤祐三「史上初の日米交渉」14, 15頁；三谷博『ペリー来航』174頁

(29) 荒野泰典「近代的世界の成熟」38頁；生田美智子『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』183頁；白石仁章『プチャーチン』77頁

(30) 荒野泰典「近代的世界の成熟」38頁；生田美智子『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』135, 150, 183頁；奥田晴樹『幕末政治と開国』286-287頁；白石仁章『プチャーチン』49-50頁；友田昌宏「研究史と本書のねらい」友田昌宏『幕末維新期の日本と世界：外交経験と相互認識』1-24頁, 6頁；山添博史「ユーラシア帝国ロシアの境界問題と幕末日本」68頁

(31) 白石仁章『プチャーチン』50, 51頁

提案した。この時も日本人のなかからロシア人への信頼と期待とが現れているのである。さすがにこの提案は、激的な攘夷論者である海防参与、水戸烈公こと水戸藩主徳川斉昭によって直ちに却下された。ところが幕府がプチャーチンとの交渉の全権に任命したのは、まさに筒井政憲と川路聖謨とであった⁽³²⁾。水戸烈公の攘夷論はロシアへの期待を前にまったく無視されているのである。

1853年12月31日、日露交渉が始まった。ロシア側は筒井の善良さと川路の知恵を高く評価した。筒井もプチャーチンの誠実さと丁寧さを高く評価した。川路もプチャーチンがただならぬ人物であると記録した⁽³³⁾。

1854年1月24日プチャーチンは交渉を一時中断して、クリミア戦争についての情報収集のために上海に赴いた。そのあと彼は神奈川条約の締結と彼の新しい旗艦の沿海州への到着を知った。驚くべきことにこのフリゲート艦は「ディアナ」号という名であった。この新しい「ディアナ」号は1854年11月に下田に到着し、プチャーチンは1854年12月10日に筒井および川路との交渉を再開した⁽³⁴⁾。

ところが1854年12月11日に地震が日本を襲った。下田を含む東海地方では特に地震が頻繁である。この時の地震は特に激烈で、下田の家屋の90%が破壊された。「ディアナ」号の乗組員は、3人の日本人を救助した。「ディアナ」号も大きな損害を受けた⁽³⁵⁾。

クリミア戦争はすでに始まっていた。そこでロシア人と日本人は協議し、「ディアナ」号を戸田湾で修理することを決めた。それは戸田湾が駿河湾奥の入り組んだ地点にあり、外航船からの発見が困難だと考えられたためであった。日本の漁船が「ディアナ」号を戸田湾まで曳航したが、途中で嵐にあうと、壊れかかっていたこの船はそのまま沈んでしまった。今度は日本人がロシア人を救助する番であった。かくして、日露両国は非常に友好的な雰囲気の中で両国の友好と国境策定とに関する1855年の下田条約を締結した。プチャーチンは商業条約を結ぶことはできなかったが、彼は日本とロシアとの間の友情の礎を置いた。条約締結後、プチャーチンとその部下たちは日本人の助けを借りて戸田湾で洋式スクナー船「戸田」号を建造し、それに乗って故国に帰った。この時日本人は洋式船の建造技術を身に着けた。このような船は君沢型と呼ばれ、江戸時代末の標準的なスクナーとなった⁽³⁶⁾。

このあと、筒井政憲は1959年に平和裏に逝去した。川路聖謨は明治の官軍が江戸に近付いていた1868年、幕府の殉教者として自殺した。プチャーチンは1859年に伯爵となったが、彼の

(32) 生田美智子『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』138頁；白石仁章『プチャーチン』52, 60頁

(33) 沢田和彦「ゴンチャロフ『日本渡航記』再読：内外の史料との比較で」『一橋論叢』第114巻第3号1995年, 562-584頁, 573頁；白石仁章『プチャーチン』64, 65, 66頁；三谷博『ペリー来航』159頁

(34) 沢田和彦「ゴンチャロフ『日本渡航記』再読」576頁；白石仁章『プチャーチン』71, 81, 85頁；三谷博『ペリー来航』156, 224頁

(35) 白石仁章『プチャーチン』17, 18-19頁；三谷博『ペリー来航』225頁

(36) 生田美智子『外交儀礼から見た幕末日露文化交流史』138頁；木崎良平『漂流民とロシア』150頁；白石仁章『プチャーチン』88, 91, 96-97頁；三谷博『ペリー来航』225, 231, 238頁

紋章には日本の侍の絵が描かれていた。プチャーチンと日本との関係は明治維新以降も続き、1881年には彼は日本帝国政府から勲一等旭日章を授与された。これは彼が日本からロシアに留学した学生のほとんど全員を援助したからであった⁽³⁷⁾。フヴォストフが押収した日本の火砲は、現在ペテルブルグのクンストカマラにある。それには「倭寇」状況の証拠である大友義鎮のヨーロッパ式の印章が捺されている⁽³⁸⁾。

結論

上記の日露交渉史から以下のことが主張できる。

理由はわからないが、ラクスマン来航以前からすら一部の日本人はア・プリオリにロシア人に好意的である。ラクスマン来航時にも、ゴロウニン事件に際しても、プチャーチン来航時にもロシア人と日本人とはお互いを同じ人間とみなしており、この相互信頼が様々な問題を解決した。同じ1853年来日したプチャーチンとペリーとは比較するうえでの好一对である。ペリーは幕府の法を無視して下田に入港した。プチャーチンは幕府の法に応じて長崎に入港した。ペリーは日本人を信用しなかった。プチャーチンは日本人を信用した。ペリーは日本人を野蛮人をみなし、脅迫によってより有利な交渉を結ぼうとした。プチャーチンは常に、文明人に接するように日本人に接し、相互の協議によって交渉を進めた。一方で日本人はロシア人を隣人とみなした。他方でロシア人は日本人とその文化とを尊重した。筆者が感じるころでは、ロシア人には人種を差別したり、全く異なった文明の人々を見下げたりする能力が欠けているようである⁽³⁹⁾。このようなロシア人と日本人との関係は、たとえ一時的に困難になることはあるにせよ、長期的には友好的なものであり続けるだろう。

(37) 沢田和彦「ゴンチャロフ『日本渡航記』再読」572頁；白石仁章『プチャーチン』103, 105, 133頁

(38) 岡美穂子「海と権力」392-393頁

(39) 筆者にはロシア人を侮辱する意図は全くない。